日曜 AM 9:00～9:30（フジテレビ系列）放送

ゲゲゲの鬼太郎（きたろう）

第28話

「幻想譚・猫町切符」


フジテレビ

制作　読売広告社



東映

企画	清水賢治（フジテレビ） 鈴木専哉（フジテレビ） 木村京太郎（読売広告社）
プロデューサー	清水慎治
製作担当	樋口宗久
原作	水木しげる コミックボンボン テレビマガジン たのしい幼稚園 おともだち 連載 （講談社）
シリーズディレクター	西尾大介
脚本	大橋志吉
演出	吉沢孝男
音楽	和田薫
キャラクターデザイン	荒木伸吾
総作画監督	姫野美智
美術デザイン	浦田又治

作画監督	
美術	
原画	
仕上	
撮影	
編集	片桐公一
録音	今関種吉
音響効果	森川永子
選曲	西川耕祐
記録	
製作進行	
演出助手	

【オープニング】

ゲゲゲの鬼太郎

作詞／水木しげる
作曲／いずみたく
唄・編曲／憂歌団
（wea japan）

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
朝(あさ)は寝床(ねどこ)で　グーグーグー
たのしいな　たのしいな
おばけにゃ　学校(がっこう)もしけんも
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌(うた)おう　ゲゲゲのゲー

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
昼(ひる)はのんびり　お散歩(さんぽ)だ
たのしいな　たのしいな
おばけにゃ　会社(かいしゃ)も仕事(しごと)も
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌(うた)おう　ゲゲゲのゲー

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
夜(よる)は墓場(はかば)で　運動会(うんどうかい)
たのしいな　たのしいな
おばけは　死(し)なない　病気(びょうき)も
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌(うた)おう　ゲゲゲのゲー

【エンディング】

カランコロンのうた

作詞／水木しげる
作曲／いずみたく
唄・編曲／憂　歌　団
（WEA JAPAN）

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
おばけがポストに　手紙(てがみ)を入(い)れりゃ
どこかで鬼太郎(きたろう)のゲタの音(おと)

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
ドッタンバッタ　ゴロゴロ
ギャアギャア　ギーギー　ドタドタ
どこかでおばけの　うめき声(ごえ)

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
ゲゲゲの鬼太郎(きたろう)　たたえる虫(むし)たち
どこかへ鬼太郎(きたろう)は　消(き)えて行(ゆ)く
カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン

河原

電車が鉄橋を越えて行く。

それを、河原に座って、ボーッとなって見ているのはサラリーマンの秀夫（四十）。疲れきっている。

弁当を食べている。

秀　夫「あーあ――」

と、その横を通るのは、ノラ猫。

秀　夫「お前は、気楽でいいよな――」

と、弁当のおかずをやる。喜んで食べるノラ猫。

秀　夫「あー――。困っちゃったんだよな」

ノラ猫「ニャー、ニャー――」

秀　夫「会社、馘になったんだ。リストラで――」

ノラ猫「ニャー――」

秀　夫「まだ、マンションのローンがあるって云うのに――」

ノラ猫「ニャー――」

秀　夫「うちの奴には、云ってないん。云えないよな――。だから、こうして、

弁当持たされてさ――」
ノラ猫「ニャー――」
秀　夫「あいつは、会社に行ってると思ってんだよ。あーあ――。まいったなァ」
ノラ猫「ニャー――」
秀　夫「お前は、自由でいいなァ。いっそこの事、ノラ猫みたいになりたいよ」
と、そのノラ猫は、誘うように『ニャー、ニャー』と鳴くと歩き出す。
秀　夫「なんだ――？」
フラフラとノラ猫の後をついて行く。

2　藪

ノラ猫が歩く。その後を追う秀夫。
秀　夫「おい、どこへ行くんだ――？」
まわりは、ドンドンと暗くなって行く。
秀　夫「ここは、いったい――か」
ノラ猫と秀夫は、スウーっと、暗闇の中へ消えて行く。
どこからともなく、『ニャー』と猫の泣き声が聞こえて――。

3 サブ・タイトル

4 ビル街

ネズミ男の声「さーさー、よってらっしゃい、見てらっしゃい。御用とお急ぎでない方は、聞いてちょうだい」

5 ビルとビルの間

露店を開いているのは、ネズミ男。

ネズミ男「あなたが無くしてしまったモノが、この水晶玉に映し出されるって寸法だ。会社の大切な書類、恋人からのプレゼント、どこかに忘れたモノを探してあげようってんだ。さあ、なんでも云ってちょうだい」

と、一人のサラリーマンを指さして、

ネズミ男「そこのあなた、とうの昔に無くした奥さんへの愛情でも探してやろうか。えっ、そんなものいらない。あっ、そうかい」

と、ネズミ男の前には、疲れた感じの礼子（三十六）が。

ネズミ男「おっ、大切な結婚指輪でも無くしたかい。さっそく見つけて――」

礼　子「（悄然と）いえ、主人がいなくなっちゃって」

ネズミ男「おー、旦那さんが?!」

礼　子「どこを探してもいないのよ。ローンに追われてて。どうしたらいいの」

と、一枚の写真を取り出している。秀夫が写っている。

ネズミ男「（モノで）こりゃ、金になりそーだな」

6　ゲゲゲの森

そこを歩いているのは、鬼太郎。

肩の所に目玉。

近くでは、ノラ猫たちが、鳴いている。

鬼太郎「ノラ猫たちが、増えましたね」

目　玉「ああ――。鬼太郎、知っておるか」

鬼太郎「えっ――?!」

目　玉「昔から、行方不明の人間が多くなると、ノラ猫も増えると云われている」

鬼太郎「本当ですか――？」
目　玉「さあ、どうしてかは、わからんがの」
そこへ、『おーい、鬼太郎、鬼太郎ー！』と、叫びながら来るネズミ男。

7 鬼太郎の家・前

鬼太郎、秀夫の写真を見ながら――
鬼太郎「でも、妖怪たちの仕業だとわかったわけじゃないんだろ――」
ネズミ男「何云ってやがんだよ。妖怪の仕業だったら、手遅れになる所だ。それを、事前に防ぐのが、鬼太郎の役目じゃねーか。なあ、目玉のオヤジさん――」
目　玉「まあ、そうじゃがの――」
ネズミ男「奥さんも困ってんだ。探してやろうぜ――」
鬼太郎「うーん――」
ネズミ男「さっ、そうとなったら、お仕事、お仕事――」
目玉は、ピョコンと鬼太郎から降りて、
目　玉「わしは、ネコ娘を待っているよ」
ネズミ男「あいつになんの用なんだ？」

目　玉「目がちょっとヒリヒリしてての。結膜炎かもしれん。ネコ娘が、薬草を持って来てくれるんじゃ」

ネズミ男「わかった。オヤジさん、鬼太郎を借りるぜ」

と、鬼太郎の背中を押す。

8 河原

そこに、ネズミ男と鬼太郎。

ネズミ男「ここまでの足取りは、ついてんだがよ」

鬼太郎、辺りを窺いながら、

鬼太郎「全然、妖気は感じないけどな」

と、そこへノラ猫。

ノラ猫「ニャー、ニャー――」

ネズミ男「この野郎ー！。猫はでーきれーなんだ。あっちいけっ！」

蹴飛ばそうとする。

鬼太郎「待てよ――」

と、ネズミ男を止める。

ノラ猫は、鬼太郎の足にまとわりついて、しきりに鳴く。

鬼太郎「どうしたんだろ？」

ネズミ男「エサでもねだってんだろ」

ノラ猫「ニャー、ニャー、ニャー」

鬼太郎「何かあるみたいだ——？」

ネズミ男「おっ——?!」

9 藪

ノラ猫が歩く。

その後ろをネズミ男と鬼太郎が。

ネズミ男「おいおい、どこへ行こって云うんだよ？」

鬼太郎「案内してくれるみたいだ」

まわりは、どんどんと暗くなって行く。

スウーっと、暗闇の中へ消えて行く鬼太郎たち。

10 暗闇の中

鬼太郎たちがいる。

ネズミ男「なっ、なんだ?! まわりが見えねーじゃねーか――」

ノラ猫「ニャー、ニャー――」

と、一方を指さす。

地面の所には地下に降りて行く階段が。

鬼太郎「通路だ――」

ノラ猫は、去って行く。

11

地下通路

――薄暗い。

鬼太郎、ネズミ男が歩く。

ネズミ男「この奥に、あの男はいるのかよ?」

鬼太郎「行けば、わかるらしい――」

12

同・奥

鬼太郎たちが来ると、目の前には、ポッカリと開いた空間が。
そこには、何やら古めかしい機械のようなモノが。
ネズミ男「なんだ――？」
と、『おい、おめーたちは、何者だ』
と野太い声が。
鬼太郎「えっ――?!」
その機械の後ろから出て来るのは、恰幅のいい猫。（以下、出て来る猫たちは、二本足で歩く）
ネズミ男「うわー、でけえ猫?!」
慌てて鬼太郎の後ろに隠れる。
恰幅のいい猫「でかくちゃいけねーのか」
ネズミ男「いえいえ――」
恰幅のいい猫「なんだ、おめーたちも行きたいのか？」
と、機械の前の椅子にドッカリと座る。
鬼太郎「えっ――?!」
恰幅のいい猫「猫町だよ――」
ネズミ男「猫町?!」

鬼太郎「この人も、そこへ――」
と、写真を見せる。
恰幅のいい猫「ああっ――。この前の電車で行ったよ」
鬼太郎「電車で――?!」
ネズミ男「（小声で）なんだ――?」
恰幅のいい猫「どれ、調べてやるよ――」
と、古めかしい機械をいじる。
恰幅のいい猫「おお――。今なら、次の電車にまだ間に合う」
再び、機械をいじる。
と、恰幅のいい猫の前には、切符が二枚出て来る。
それを、鬼太郎に渡し、
恰幅のいい猫「ほら、猫町切符、二枚だ！」
鬼太郎「猫町切符――」
恰幅のいい猫「その切符がありゃ大丈夫だからよ」
鬼太郎「でも、どこから乗れば――」
恰幅のいい猫「地下鉄から乗り継いで行けばわかる」

13

地下鉄の駅

ガガガガーっと電車が走り込んで来る。
乗客たちが降りて来る。
鬼太郎やネズミ男たちが、一般客と一緒に、電車に乗る。

14

別の地下鉄の駅

ガガガガガーと電車が走り込んで来る。
降りて来るのは、鬼太郎とネズミ男。
鬼太郎「ここで、乗り換えだ」
と、階段の方へ。

15

別の地下鉄の駅

電車が走り込んで来ると、降りて来るのは、鬼太郎とネズミ男。
鬼太郎「乗り換えだ——！」

ネズミ男「またかよ――」

×　×　×

画面には、ガガガガーッと行き交う電車が、いくつも交差して。

16 通路

そこを歩くのは鬼太郎とネズミ男。

ネズミ男「おい、鬼太郎、誰もいなくなっちまったじゃねーか――」

鬼太郎「でも、この先に猫町線があるはずなんだ」

ネズミ男「猫町線だと――」

鬼太郎「ああ――」

と、目の前には、駅が見えて来る。

――無人の駅。

17 無人の駅

ポツン、ポツンと昔の電灯。

ベンチに座っている鬼太郎たち。

ネズミ男「おい、誰もいねーぜ――」

鬼太郎「うん――」

ネズミ男「確か、東京の地下には、作ったはいいが、使われていねー駅があるって話だけど。ここが、そーなんじゃねーのか」

鬼太郎「どうかな――」

ネズミ男「だったら、待ってたって電車は――」

と、トンネルの奥から明かりが。

ゆっくりとこちらに向かって来る。

ネズミ男「おお――?!」

スウーッと走って来るのは、昔風の電車。枠は、木で出来ている。

ゆっくりと鬼太郎たちの前で止まる。

そして、ドアが開く。

鬼太郎「ネズミ男、どうするんだ?」

ネズミ男「乗りかかった船だ。行ってやるぜ」

鬼太郎たちは、電車に乗る。

ガタンと扉が閉まる。

18 地下のトンネル

電車がゆっくりと進む。

19 走る電車

ベンチに座っている鬼太郎たち。

ネズミ男「他に客はいねーみたいだな」

鬼太郎「ああ――」

と、電車は、止まる。

駅名の看板があり『三毛猫、次は化け猫』の表示。

ネズミ男「誰も乗ってこねーな――」

と、電車は走り出す。

× × ×

と、客車の中に猫の車掌が。

鬼太郎たちの前へ来ると、

車　掌「切符を拝見――」

鬼太郎「はい――」

車掌は、切符を切ると去って行く。

ネズミ男「なんか、不気味だな――」

ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトンと電車は進む。

20 鬼太郎の家・中

目玉が、液体で、顔を洗う。

見ているのは、ネコ娘。

ネコ娘「目玉のオヤジさん、どう――?」

目　玉「ああ――。いい気持ちじゃ。ヒリヒリする感じが収まっていくわい」

ネコ娘「よかった――」

と、まわりを見て、

ネコ娘「鬼太郎は――?」

目　玉「何やら、行方不明になった人を探しに行った――」

ネコ娘「ふーん――」

21

ゲゲゲの森・外

ネコ娘が歩く。

と、木々の間からは、ノラ猫が。

ネコ娘「元気にしてる?!」

ノラ猫「ニャーニャー、ニャーニャー」

ネコ娘「なんですって、鬼太郎が、猫町線に乗ったァ」

ノラ猫「ニャー――」

ネコ娘「そりゃ大変っ!」

と、慌てて、森の方に戻って、

ネコ娘「オヤジさんに早く報せなきゃ」

22

走る電車

ガタンゴトン、ガタンゴトン。

ネズミ男「いつ着くんだよ。その猫町にはよ。ったく――」

と、手を見れば、グワワワワッと変化して猫の手になって行く。

ネズミ男「なっ、なんだ――?! おっ、おい、鬼太郎――」
鬼太郎「ああ――」
と、鬼太郎の手も猫の手に。
鬼太郎「どっ、どうして?! くっ、くっ、」
鬼太郎の耳が上の方に引っ張られて、猫の耳に。
ネズミ男もそうだ。
ネズミ男「うわっ――?!」
ガタンゴトン、ガタンゴトン。
鬼太郎の鼻が、ムクムクと持ち上がると、猫の鼻に。そして、ピンと猫のヒゲが。
鬼太郎の目、鋭い猫の目に。
チャンチャンコは、皮膚の一部になり、ドラ猫のようになる。
鬼太郎「ああ――」
ネズミ男「(ビックリして)おっ、おい、鬼太郎、おめー、猫になってるぞ」
鬼太郎「そう云うネズミ男だって、猫だ」
ネズミ男「えー――?!」
と、顔のあちこちをいじる。すっかりと猫になっている。

ネズミ男「なっ、なんで、俺が猫になんかに」
扉の方に行き。
ネズミ男「出してくれ、出してくれ――」
が、扉は開かない。
その間には、ニョキニョキと猫の尻尾が生えて来る。
ネズミ男「うわわわわ――?!」
完全に猫になっている鬼太郎とネズミ男。
と、ガタンと止まる電車。
車掌の声「終点の猫町、猫町――。お忘れ物のないようにお降り下さい」
駅の所には、『猫町』の看板。
鬼太郎「――?!」

×　×（C・M）×　×

23 猫町駅

そこの改札を通る、猫になった鬼太郎やネズミ男。

24

猫町

鬼太郎たちが来る。
そらには、渦巻いた変な雲。
——不思議な町。
まるで、昭和三十年代の街並み。
歩いているのは、全部猫。
店もあり、客も主人も猫。

ネズミ男「おいおい、見渡す限り猫じゃねーか?!」
鬼太郎「そのようだな——」
ネズミ男「見ているだけで背筋がゾクゾクするぜ。うわー——」
鬼太郎「そう云うお前も、猫なんだぜ」
と、ガラスにネズミ男の姿が映る。不細工な猫だ。
ネズミ男「ギャー、気持ちわりー猫だ!」
ビックリして、逃げ出してしまう。
ネズミ男「おわわわわ——」
が、ハタと止まり。

ネズミ男「ビックリしている場合じゃねーよ。俺なんじゃねーか。ああ――。よりによって、どーして俺が猫なんかに」

と、頭を抱えてしまう。

近くを歩いていた猫が。

猫「どうしました？　顔色が悪いみたいですけど」

ネズミ男「ほっといてくれ――」

25 猫町・別の街角

鬼太郎とネズミ男が歩く。

ネズミ男「とにかく、あの男を見つけて、こんな所からは、とっととオサラバしようぜ」

鬼太郎「この町のどこかにいるはずだ――」

26 古い写真館の前

そこで、買い物籠をぶら下げた猫に聞いている鬼太郎とネズミ男。

秀夫の写真を見せて、

猫「この人間に似た猫ねェ――。見ないわよ」

鬼太郎「そうですか――？」

猫「でも、他の猫に聞けば、わかるかもしれないわよ。みんな、親切だから」

と、去って行く。

ネズミ男「親切な猫だ?! 何云ってやがんだ」

27 川

そこでは、のんびりと釣をしている猫が。

聞いている鬼太郎やネズミ男。

猫「うーん――。見かけないけどな」

と、竿が反応。

猫「おっ、おっ――」

と、魚を吊り上げる。

猫「やー、釣れた、釣れた――」

猫、ニッコリすると、魚を鬼太郎たちに差し出して、

猫　「ほら、上げるよ。うまいぞ」
鬼太郎「あっ、ありがとう――」

28　原っぱ

そこでは、土管の上に寝転がっている猫。
その横では、子猫たちが走り回って遊んでいる。
その横を通る鬼太郎やネズミ男。
鬼太郎「のんびりした町だな――」
ネズミ男「ケッ――。大嫌いだよ。いたる所に猫がいやがる」
鬼太郎「――」
ネズミ男「フン――。全く、どこへ行っちまったんだか――」
フト見れば、路地の奥で、おいしそうに鰹節をかじっている猫が。秀夫である。
ネズミ男「あれ――。ああ、あいつ――」
鬼太郎「ああ――」

29 路地

秀夫の前に、鬼太郎たち。

秀　夫「嫌だよ。俺は、もう、人間に戻るつもりはないよ」
鬼太郎「そうは云うけど――」
秀　夫「猫でいる方がずっといいんだ」
ネズミ男「お前、こんな町のどこがいいんだ」
秀　夫「のんびりしていて最高だよ。自由きままだしね――。最高だ」
ネズミ男「奥さんが心配してたぞ」
秀　夫「あいつも、猫になればいいんだよ。ノラ猫の方が、ずっといい。ローンの事も考えなくて済む」
鬼太郎「――」
秀　夫「この町にいてもいいし、しばらくしたらノラ猫として人間の世界に行ってもいいんだ。素晴らしいだろ」
ネズミ男「そんな事云わずによ。お前が戻れば、こっちは金が入るんだからよ」
鬼太郎「金が――?!　ネズミ男、また、金儲けの事に、僕を巻き込んだな」
ネズミ男「いや、奥さんも安心するだろうって――」

秀　夫「とにかく、もう、ギスギスした人間世界に戻る気はないよ」

鬼太郎「うーん――」

30　地下の空間

　恰幅のいい猫の前にネコ娘。

恰幅のいい猫「ネコ娘、お前さんが猫町に行きたいなんてな。なんか、用でもあるのか？」

ネコ娘「ううん、ちょっとね」

恰幅のいい猫「まあ、ネコ娘の頼みとあっちゃ――」

　と、旧式の機械をいじる。

　ガチャンと出て来る猫町切符。

31　地下のトンネルの中を走る電車

32　猫町線・電車・中

33

猫町

乗っているのは、ネコ娘に目玉。

目玉「他には、乗客はいないようじゃな」

ネコ娘「うん――」

ガタンゴトン、ガタンゴトン。

と、『うっううう――』と、段々と猫度が増すネコ娘。

より目は鋭くなり、耳も猫の耳に。

目玉「おっ、おい、ネコ娘。どうしたんじゃ」

そう云う目玉も、徐々に鋭い目に。

目玉「おおおおお――?!」

そして、横に伸びて行き、ニャンコの目になる。

目玉「うわわわわ――。わしの目が、わしの目が――」

ネコ娘「大丈夫よ。猫の目になるだけだから」

目玉「上がり目、下がり目、ぐるっと回ってニャンコの目と云うが――」

ネコ娘「とにかく、鬼太郎を連れて帰るまでは、我慢して――」

板塀の横を歩く秀夫。
その横に、ネズミ男と鬼太郎。
ネズミ男「なあ、一回だけ、人間に戻ってくれりゃいいんだかよ」
秀　夫「だから、もう、放っておいてくれよ」
と、紙芝居猫が、子猫たちに紙芝居を見せている。
子猫たちは、水飴をなめている。
秀　夫「ここの方がいいんだ――」
秀夫も、紙芝居を眺める。
すると、『おう、おめーたち、新顔か』の声と共に来るのは、大きな猫(猫又)。
秀　夫「あっ、どうも――」
ペコリと頭を下げる。
他の猫たちも、大きな猫に頭を下げている。
慌てて鬼太郎の後ろに隠れているネズミ男。
ネズミ男「(小声で)なんだ――？」
秀　夫「(小声で)この猫町をしきっている猫だよ――」
鬼太郎「どうも――」

大きな猫「どうだい、猫町には慣れたかい」
秀　夫「ええ――。とても、いい所なんで」
大きな猫「そりゃ、そーよ。猫町は、最高だからな――」
秀　夫「はい――」
ネズミ男「（小声で）どうだか――?!」
大きな猫「猫はいいだろ。バカなネズミとは、大違いだからな――」
秀　夫「全くで――」
ネズミ男「（小声で）何云ってやがる」
大きな猫「おっ、なんだ――?」
ネズミ男「えっ、いえいえ――」
大きい猫「調度いい、ネズミの取り方を教えてやるぜ」

と、原っぱの方へ。

ネズミ男「そんなもん、教わりたくねーよ。鬼太郎、行こうぜ」
鬼太郎「おい、奴の尻尾を見てみろよ」

大きな猫の尻尾は、二つに割れている。

ネズミ男「二つに割れている――」
鬼太郎「あれは、猫又だ――?!」
ネズミ男「おお――」

鬼太郎「神通力を持った化け猫だよ」

ネズミ男「化け猫――?!」

と、猫又がネズミ男の方を見て、

猫又「（振り返って）お前たち、どうした？　ほら、早く来い――！」

ネズミ男「いえ、あの。今度って事に――」

猫又「んっ――?!」

と、ネズミ男の事を不審に思った猫又は、ネズミ男の所に。

猫又「おまえさん、ちょっと鳴いてみなよ」

ネズミ男「鳴くんですか――」

猫又「ああ――」

ネズミ男「チューチュー――」

『あっ、しまった』と口を閉じる。

鬼太郎「あっ、ネズミ男?!」

鬼太郎も、『あっ』と口を閉じる。

猫又「ネズミ男だとっ?!　お前――?!」

クンクンとネズミ男の匂いをかぎ、

猫又「ネズミだ！」

と、いきなり目がギラリと光り。

ネズミ男「いけね——」

猫　又「おーい、みんなー、ネズミが潜り込んでるぞー——」

と、『ニャーニャー、ニャーニャー』

と猫たちが集まって来る。

ネズミ男「うわわわ——」

猫　又「お前って奴は——！」

猫又、ムクムクと体が大きくなる。

怒って毛を逆立てると、爪をギギンと伸ばす。

猫　又「（ドスの効いた声）ニャーゴー！」

ネズミ男「ヒッ——?!」

ネズミ男、鬼太郎の後ろに隠れて、

ネズミ男「鬼太郎、なんとかしてくれよ」

鬼太郎「止めるんだ！　僕たちは、ただ、人間を探しに来たんだ！」

猫　又「お前も、ネズミの仲間か——？」

猫たちが鬼太郎たちの方へ。

鬼太郎「くっ、髪の毛針！」

と、頭の毛が、猫たちに飛んで行くが、ヘロヘロと飛ぶだけ。

鬼太郎「ダメだ。猫になって、霊力が落ちてしまった」

ネズミ男「なんだとォー——?!」

猫　又「みんな、やっちまえっ！」

『ニャーゴー』と襲って来る猫たち。

ネズミ男「うわわわわ——」

鬼太郎と共に、すぐに逃げ出す。

34

猫町の駅

そこへ逃げて来るネズミ男と鬼太郎。

改札口へ行き。

ネズミ男「おい、人間界へ返してくれ！」

駅　員「切符は——？」

ネズミ男「そんなもんはねーよ」

駅　員「なら、ダメだ——」

と、追って来る猫たち。

猫　A「いたニャーン」
猫　B「ネズミだ、ネズミだ」
ネズミ男「うわわわ――」
鬼太郎と共に、すぐに逃げる。
と、前に立ちふさがっているのは、猫又。
猫　又「もう、どこへも逃げられないぞ！」
ネズミ男「おお――?!」
猫　又「ネズミの分際で、猫町に来るとは、いい度胸だ」
ネズミ男「いや、知らなかったんだよ」
が、グワッとネズミ男の首根っこを摑む猫又。
ネズミ男「ニャーン、ニャーン」
猫　又「いまさら、おせーよ！」
鬼太郎「ネズミ男――?!」

35　広場

そこには、捕まっているネズミ男と鬼太郎。

その前に猫又。

猫　又「こいつらは、ネズミの分際で、この町に入った。みんな、どうしたらいい」

猫たち「やっちまえ、やっちまえ！」

猫　又「よーし！」

グワッと一段と体が大きくなる猫又。

と、ギギンと猫又の爪が鋭く伸びる。

猫又、腕を振り上げて、

猫　又「おらー――！」

ネズミ男「鬼太郎、助けてくれ！」

鬼太郎「今の僕じゃ、どうにもならないよ」

グオンと腕が振り下ろされようとした時。

『ちょっと、待ってー！』と、慌てて来るのは、ネコ娘。肩の所に目玉。

猫　又「おう、ネコ娘。こんな所に来るなんて、珍しいじゃねーか。どうした？」

鬼太郎「ネコ娘――?!」

ネコ娘「この人は、違うんだよ。とにかく、私の話を聞いて――」

猫　又「なんだ――?!」

×　　×　　×

36

猫町駅

猫又の前に、ネコ娘。

猫　又「ほー、こいつは、ネズミじゃなくて。鬼太郎と云うのか――」

ネコ娘「そうなんだよ。困っている妖怪を助けてくれたりしているんだ」

猫　又「そうかい――」

ネコ娘「それに、こっちが、有名な目玉のオヤジさん――。今は、猫の目をしてるけど」

目玉、目をパチクリとさせて、

目　玉「ネコ娘の話は本当じゃぞ」

猫　又「まあ、ネコ娘がいつも世話になっているんじゃ、仕方あるまい。ほれ――!」

鬼太郎を、ネコ娘たちの方へ。

ネコ娘「もう一つ、お願いがあるんだけど」

猫　又「なんだ――?」

ネコ娘「鬼太郎を元に戻したいの――」

猫　又「ネコ娘の頼みじゃ仕方ねーな」

古い機械の前、ガシンガシンと操作をする猫又。
と、出て来るのは、逆猫町切符。
それを、ネコ娘に渡す。
猫　又「ほら、逆猫町切符だ。これをもって、地下鉄に乗れば、元に戻る」
ネコ娘「助かるよ。猫又さん――」
目　玉「すまんのう――」
猫　又「でも、こいつだけは、許せない」
と、ネズミ男を捕まえる。
ネズミ男「うわわわ――」
ネコ娘「ああ、そいつなら、煮て喰うなり、焼いて喰うなり、好きにしていいよ」
ネズミ男「うわわわわー。ネコ娘様ー、お助けくださーい」
鬼太郎「助けてやってください」
目　玉「わしからも頼む――」
ネズミ男「ネコ娘様ー、なんでも云う事は聞きまーす」
ネコ娘「仕方ない。助けてやるか――」
と、その時、ガタンゴトンと電車がホームにすべり込んで来る。
猫　又「ちょうどいい。ネコ娘、これに乗って行くといい――」

ネコ娘「ありがとう――」

電車からは、猫が降りて来る。

と、秀夫が、出て来た猫に向かって、

秀　夫「おっ、お前――。ここに来たのか」

猫「あっ、あなた――。こんな所にいたの」

猫は秀夫の前へ。

猫「私、もう、ローン地獄に追われるよりは、いっその事、ノラ猫になった方がいいと思って――」

秀　夫「ここは、いい所だぞ。人間世界より、ずっといい――。ここで、暮そう」

ネズミ男「全く、信じられねーぜ奴らだぜ。この町は、俺に取っちゃ、地獄だよ」

ギロリと猫又が睨む。

ネズミ男「いや、あっ、天国っスよね」

37　ホーム

ヂリリリリとベルが鳴ると、電車は走り出す。

38

走る電車の中

そこに座っている鬼太郎、ネズミ男、ネコ娘、目玉。
ガタンゴトン、ガタンゴトン。
すると、だんだんと鬼太郎は、元の鬼太郎に。
ネズミ男は、元のネズミ男に。
ネコ娘も元のネコ娘。
目玉も元の目玉に戻って行く。

鬼太郎「フー、危ない所でした。あんな町があるなんて――」
目　玉「そうじゃの――。でも、考えようによっては、人間たちに、ああ云う逃げ場所があってもいいかもしれんの――」
鬼太郎「そうですね――」
ネズミ男「何云ってやがんだ。あーあ、ひでー目にあったぜ。全く、悪夢とは、この事だ」
目　玉「ネズミ男、全ては、ネコ娘のおかげじゃ。礼を云うんじゃな」
ネズミ男「フン。誰が、猫なんかに頭を下げるか――」
ネコ娘「じゃ、もう一回、猫町に戻る――」

ネズミ男「ヒエー。それだけは、勘弁してくれー！」

39

ビルの街並

忙しそうに歩いている人間たち。
クラクションを鳴らして、車が通り過ぎる。
どこかでは、ビルの工事。
歩いている鬼太郎、目玉、ネズミ男。
それぞれ、首を捻って。

鬼太郎「あれ、父さん、僕たちは何をしていたんでしたっけ――」
目　玉「わしも、それを思い出そうとしているが、さっぱりわからんのじゃ」
鬼太郎「思い出せない――」
ネズミ男「なんだか、猫に追われていたような気もするんだがな――」

その後ろ、ネコ娘が。

ネコ娘「（モノ）ウフッ――。猫町の事は、猫だけの秘密だから、記憶がなくなっているのよ」
鬼太郎「全く、思い出せませんね――」

目　玉「うむ――」
　と、まわりには、ノラ猫たちが。
　路地から出て来たり、塀の上にいたり。
鬼太郎「ノラ猫が増えましたね――」
目　玉「ああ――。行方不明の人間が多くなると、ノラ猫が増えると云うが、どうしてなんじゃろな――?」
　と、街のあちこちで、ノラ猫たちが、『ニャーニャー』と鳴く。
　その声が、ドンドンと大きくなって――。

（つづく）

